

A お前の歳はいくつか。

B 四十六です。

A お前は東京〇〇組の土工の頭をして居たと云ふがさうか。

B さうです。

A その方でどのくらゐの収入があるのだ。

B いそがしい時は月二三百圓にはなります。

A 大分あるではないか、どうしてそれ程になるか。

B 日當の外に、百人からの土工のあたまをはねるのでそのくらゐになるのです。

A それだけの収入があるのに、お前はなぜ悪事を働くのだ。お前は今迄に賭博犯で三回、竊盜犯で二回、強盜罪で三回も罪を犯して居る。なぜさう云ふ事をするのか。

B まことに申譯がありません。

A 申譯がないではない、どう云ふ譯でそんな悪事を働くのか、二三百圓の収入があるのに、竊盜や強盜をして迄も金を取りたいと思ふのはなぜか、その金は何に使ふのか。

B その金はみんな女に注ぎ込んでしまふのです、私が悪い事をしたのはみんな女の爲めなの

です。

A その女と云ふのはお前の女房の事か。

B いいえ、女房ではありません、みんな情婦の爲めに使ひました。

A 情婦と云つても、お前には何人もあつたやうではないか、

B それは今迄には随分多勢ありました。

A そのうちでお前が一番可愛がつて居たのは誰か。

B 私は一面非常に上せ易いたちで、どの女にも一時は夢中になりましたが、それでも一番可愛がつたのは菊榮とお杉でした。

A お前が菊榮を知つたのはいつだ。

B 確か大正元年頃の事だと思ひます、菊榮が森崎で藝者をして居た時に始めて知つたのです。

A それで、お前が菊榮を殺したのはいつだ。

B それは大正三年の十二月二日の夜です。

A なぜ殺したのだ。

B 菊榮が私に隠して外に旦那を持つたからです。

A お前が菊榮を殺した時の模様を出来るだけ精しく話して見よ。

B ちやうどその時分は大森に住み替へて居ましたので、晩の十二時過ぎに客の座敷から歸つて来るのを往來で待ち構へて、海岸へ誘ひ出して不意に……を以て……しました、そしたら菊榮は體をバタバタやりましたけれども私が……して居るので聲を立てる譯には行かないで、……まるで……のやうになつて一二分で死んでしまひました。私は用意して置いた……で屍骸を……いてそれからそれを……で……證據になりさうなものはみんな……してしまひました。それで今まで誰にも分からなかつたのです。

A お前はさう云ふ方法をどうして思ひついたか。

B 私は前から殺す時は斯うしたいと思つて始終考へて居たのです。

A お前がお杉を知つたのはいつか。

B それは菊榮を殺した明るる年の正月、仲間の者と一緒に新宿へ遊びに行つた時からです。お杉はその時分〇〇樓へ〇〇と云つて勤めて居たのを、それから一年ばかり立つて私が身請けして澁谷の道玄坂へ〇〇と云ふ鳥屋を出させて妾にして置きました。

A お前は今でも杉を可愛いと思つて居るか。

B それは非常に可愛いと思つて居ます。あの女も菊榮と同様に浮氣な方で、私から散々金を絞つて置きながら幾度も私を欺したりしたので、私は度び度び腹を立てましたけれどもやつぱり可愛くて仕様がなかったので我慢して居ました。どうしても腹に据ゑかねていつそ殺してやらうかと思つたこともありましたが、あの女を殺してしまふと、もうあんなのはちよつとないと思はれたので、考へて見ると惜しくなつて殺す氣がなくなりました。

A そんなにお杉を思つて居ながらなぜ〇〇屋の娘を手込めにしたのか。

B なぜだか分りませんが私はさう云ふ性質なのです。あの晩は大分酔つ拂つて居ましたが、△屋の娘を見たらつひムラムラとそんな氣になつたのです。

A ではお前はその時までその娘を知らなかつたのか。

B いいえ、それはまへから知つて居て好い女だと思つて内内眼をつけて居る事は居ました。しかし堅氣な娘なのでべつにどうしようと思つて云ふ見はなかつたのですが、あの晩は又とない好いしほだつたのでつひそんな氣を起したのです。

A あの晩と云ふのはいつの事か。

B 大正六年の四月十九日の晩だつたと思ひます。

A その時の事を精しく話して見よ。

B その晩は××坂××と云ふ居酒屋で十時過ぎまで酒を飲んで、それから道玄坂のお杉の所へ行かうと思つて新宿の停車場へ來るとあの娘が居ました。あの娘はたつた獨りで何處かへ使ひにでも行つた歸りのやうでした。私は娘と同じ電車に乗つて見たかつたので、娘が目白までの切符を買ふに違ひないと思ひましたから私も同じ切符を買つて同じ電車に乗りました。それから目白驛で降りた時にはもうよほど其處で引返さうと思つたのですが、娘の歸る路は淋しい所だと云ふ事を知つて居ましたし、つひ跡をつけて見なくなつて附いて行きました。さうして七八町歩いて人家のない所へ來た時に聲をかけたのです。さうしたら娘は前からうすうす氣が付いてでも居たのか急に駆け出しさうにしましたから私は矢庭に：：：きました：：：。「聲を立てると聞かないぞ、殺してしまふぞ」と云ひましたがそれでも娘は：：：。：：：ので私は非常にビツクリしてまさか死んだのぢやあるまい、氣絶したんだらうと思ひましたが矢張り死んだものらしいので、此れは斯うしては置けないと思つて、その屍骸を：：：院線の土手の所で：：：いてしまひました。

A 明くる日娘の事が新聞に出た時お前は何と思つたか。

B 大丈夫分る筈はないと思ひました、菊榮の時の事があるので、大膽になつて居ました。さうしてとうとう分らずに濟んでしまつたので私は内心得意でした。

A お前はさう云ふ兇行を演じた事を、今日まで誰にも話したことはないか。

B それは女房にだけは話しました。

A 一つ話したか。

B 菊榮の時にも娘の時にも直きその後で話しました。

A なぜ話したのか、何か必要がなければ話す筈はないと思ふが、：

B 別に必要のない事でも、夫婦の間柄なら話すことがあると思ひます。

A しかし、お前と女房とは一向夫婦らしくして居なかつたと云ふではないか。お前は始終お杉の方へばかり行つて居て、お杉と夫婦のやうに暮らして居たと云ふではないか、女房に話すららぬならなぜお杉に話さなかつたか。

B あんな女にウツカリした事はしやべれません、あれは人間ぢやありません。

A では女房は人間だと云ふのか。

B さうです、女房は人間です。

A でもお前はいつも女房を人間らしく扱はないで打つたり蹴つたりして、ヒドイ目に遭はせたと云ふではないか。まるで犬猫同様に扱つて居たさうではないか。

B 犬猫同様に扱つたかも知れませんが、矢張りあの女は人間です。私は女房ならどんな事を打ち明けても大丈夫だと思ひました。あれは私がしやべるなと云へば決してしやべるやうな女ではないのです。

A お前の女房Eの話だとお前が女房に打ち明けた時、「もし此の事を人にしやべつたら貴様も殺してしまふ」と云つたさうではないか。それほど女房を信用してゐるならなぜそんな事を云ふのか。

B それはさう云つておどかして見ただけなのです。おどかしては見ましたけれども信用はして居たのです。

A 信用して居たにしろ、たとへ夫婦の間柄でもさう云ふ事はめつたに打ち明けられるものではない。打ち明けるには何かそれだけの必要があつたのではないか。お前の女房に「己は人を殺す事なんぞ何とも思はない、己の云ふ事を聞かぬ奴は誰でも殺す」と云つて威張つたさうだが、一體どう云ふ心持ちで威張つたのだ。

B どう云ふ心持ちだか自分にもよく分りませんが、ただ威張りたかつたので、威張つたのぢやないかと思ひます。

A お前は人を殺して置いて、心の中で悪い事だとは思はなかつたか。

B それは悪い事だとは思ひました。

A 悪い事だと思つて良心に咎めたので、黙つて居られなくなつて打ち明けたのぢやないか、

B 悪い事だとは思ひましたが黙つて居られないと云ふほどではありませんでした。

A では全く威張りたい爲めにしやべつたと云ふのだな。

B さうです、まあさうとしか云へません。

A お前が打ち明けた時女房は何と云つたか。

B あれは非常に氣の小さい人の好い女ですから、眞青になつて顫へ出しました。私はその様子を見るとつひ面白くなつたので、「ぐづぐづ云へば貴様も殺すぜ」と云つておどかしてやつたのです。さうするとあの女は「他人を殺すくらゐなら私を殺して下さい、私を殺してどうかあなたは自首して下さい」と云ひました。私は生意氣な事を云ふ奴だと思つたので「貴様なんぞ殺したつて仕様がな、貴様の指圖を受けなくつても殺したければ好きな奴を勝手に殺す」と

云ひました、さうしたらEは、「そんな悪い事をして置きながらまだ後悔しないのですか」と云つて、しまひには泣いて意見を始めました。私はEが泣けば泣くほど「何を泣きやあがる、貴様がいくら泣いたつて後悔なんかするもんか、うまく殺せば幾人殺したつて分りやしないんだ」と云つて威張つてやつたのです。

A 併しさう云つて威張つたあとで、お前もやつぱり女房と一緒に泣いたさうではないか。

B 泣くことは泣きましたけれども、後悔したと云ふ譯ではなかつたのです。

A ではなぜ泣いた。

B 妙な事ですが、あの女に泣かれるとしまひには私も泣いてしまふのが癖なのです。私はあの女を泣かせるのが好きでした。泣いて居る時だけは可愛い奴だと思ひました、それであの女を泣かせるやうな風にばかりしましたが、結局私も釣り込まれて泣いてしまふのです。あの女と一緒に泣くのは何だか好い心持ちでした。

A ではお前は、心の中では女房に惚れて居たのか。

B いいえ、惚れると云ふのは違ひます。

A しかし、菊榮がお前に女房と別れてくれと云つた時お前は嫌だと云つたさうではないか。お

前が女房と別れなかつたので、菊榮はやけになつて外に男を拵へたのだと云ふではないか。

B それはさうですが、何だか可哀さうな氣がしたので別れる譯に行きませんでした。

A 可哀さうだと思ふならなぜそんなにイヂメたりしたのか。

B あまりイヂメたものだから可哀さうになつたのです。

A それはおかしいではないか、イヂメるくらゐなら女房にして置く方が却つて可哀さうではないか、お前の女房は實家も相當にしてゐるし、心がけもよいし、お前よりはずつと年も若いのだから、離縁された方が却つて仕合はせな筈ではないか。

B …それはさうかも知れませんが、私はつまり、自分の爲めに泣いてくれる女が欲しかつたのです。私が悪い事をする、あとで女房はきつと泣きました、どうか眞人間になつて下さいと云つてしみじみ泣きました、それが私には悲しいやうな嬉しいやうな氣持がしました。

A ではお前は、女房を泣かせるのが面白いのでわざと悪い事をしたのか。

A いいえ、さうではありません、悪い事は矢張り自分がしたくつてしたのですが、あとで女房が泣いてくれるとそれでいくらか罪滅ぼしが出来るやうな氣がしました。つまり女房が居てくれた方が悪い事がしよかつたのです、だから私のやうな人間にはどうしてもああ云ふ女房が居

なければいけないのです。

A さうすると、若しお前にああ云ふ女房が居なかつたらお前は悪い事をしなかつたか。

B それはさうは行くまいと思ひます。しかし女房が居なかつたら、悪い事をして張り合ひがなかつたらうと思ひます。

A 女房が居る方が悪い事をするに張り合ひがある。——ではお前は女房と別れた方が好かつたではないか。さうしたらお前は善人になれたかも知れないではないか。

B いいえ、そんな事はありません。私は一生悪い事は止められません。私は善人になれたにしてもなりたいとは思はないのです、悪い事をする方がどうも面白いのです。ですから悪人ながら仕合はせに暮らして行くにはどうしても女房と一緒になければ困るのです。

A それはど女房が大切ならなぜもう少し可愛がつてやらなかつたか。

B でも可愛くないのだから仕方がありません。それに女房はイヂメなければ泣かないのです、

A 泣いてくれなければ罪滅ぼしにならないのです。

B お前は女房が泣いてくれれば罪が滅びると思つてゐるのか。

B まあそんな氣がするのです。

A お前は二人までも殺して置いて、そんな事で罪が消えると思つてゐるのか、お前はいつか一度は罪が露顯して處刑を受けるとは思はなかつたか。

B それは思ひました、どうせ一度は捕まるに極まつてゐる、捕まつたが最後疊の上で樂な往生は出来ないといつもさう思つてゐました。ですから猶更罪滅ぼしがしたかつたのです。

A すると罪滅ぼしと云ふのは、死んでから先のことを云ふのか。

B まあさうです、とても此の世では駄目だから、あの世へ行つても助かりたいと思つたのです。

A あの世とはどう云ふ事か、お前の女房は神様や佛様を信心してでも居るのか。

B 別に信心して居るやうな様子もありません。ただ「神様や佛様なんてものは本當にあるのかしら」なんて、よくそんな事を云ひます。

A すると、あの世と云ふ考へがどうしてお前に起つたのだ。

B 前からそんなものがあるやうにぼんやり考へてゐたのです。

A あの世にしる、女房が泣いてくれれば罪が滅びると思ふのはなぜか。

B なぜだか分かりませんが何となくさう云ふ氣がするのです。

A お前は今でもさう思つてゐるのか。

B さうです、今でもさう思つてゐます。私が斯うしてお調べを受けてゐる間でも、私の女房はきつと蔭で泣いて居てくれる、さう思ふと心強い氣がします。私は随分ヒドイ目に遭はせたり亂暴な事を云つたりしてあの女を泣かしましたが、泣かしたのはいい事だつたと思ひます。

A では今ではお杉の事は思はないのか。

B いいえ、思はない事はありません、お杉の事は一日だつて忘れられません、やつぱりあんないい女はないやうに思ひます。

A お前の女房はお前の爲めに蔭で泣いて居るかも知れないが、お杉は今頃どうしてゐると思ふのか。

B お杉の奴は好きな男でも引つ張り込んで浮氣をしてゐるに違ひありません、さう思ふと私は猶更氣が氣でならないのです。

A お杉と女房と執方の事を餘計考へるか。

B 執方の事も始終考へます。しかし、ほんたうに氣が揉めるのは、お杉の方です、女房の方は向うで私の事を考へてゐてくれると思ふので氣が揉めることはありません。

A 随分勝手な話ではないか。

B 勝手な話ですけれどもどうもさうなのです。

A お前の女房が泣いてくれれば罪が減びると云ふが、さう云ふ人の好い女房をイチメたり泣かせたりするのは悪い事ではないか。

B それは悪い事かも知れませんが、でも何處かに悪くない譯があるやうに思へるのです。女房を泣かせると何だか妙に可愛くなつて来て、不思議に好い氣持ちがして、私も一時は女房と同じやうな、善人になつた氣持ちがする、それが悪いことだと云ふ風には思へないのです。悪い事ならさう云ふ好い氣持ちがする筈はありませんし、たとへ悪いことだとしても、女房を散散泣かして私も一緒に泣いて泣くと、それで罪が消えたやうな清淨潔白な氣分になる事はたしかなのです、どうも理窟に合はないやうですが實際さうなのです。それで私のやうな悪人はどうせ一生善い事がやれる筈はないのですから、同じ悪い事をするにしてもたまには好い氣持のするやうな悪いことをして見たい、さうでもしなければ苦しくつてやり切れない、だから神様が、——まあそんな風に私は考へるのですが、——もし世の中に神様と云ふものがおあんなさるなら、きつと私たち悪人の爲めに悪いことをしてもたまには好い氣持ちになれるやうな方法

を授けて下すつたに違ひないので私が女房をイヂメるのなどはつまりはまあそれでいくらかでも氣を樂にするやうにと云ふ、神様の思召してはないかと思ふのです。人をイヂメて好い氣持ちがすると云ふのには、何かさう云ふ譯がなければならぬと思ひます。ですから私が女房をイヂメるのは菊榮を殺したり△△屋の娘を殺したりしたのは非常に譯が違ふのです。又女房の身になつて見てもさうだと思ひます、夫婦である以上は繋がる縁で夫の罪を自分が引き受けて夫の代りに苦しんでくれる、打たれたり泣かされたりするのは辛いでせうけれどもそれを堪へてやれば夫の罪滅ぼしになる、あの世へ行つても夫は地獄へ墮ちないで済む、さう思つてくれればいいのだと思ひます。

A お前はさう云ふ心持ちを女房に打ち明けた事があるのか、

B それはありません、自分がこんな心持ちだと云ふ事は自分にも分らなかつたのです、今日始めて分つたのです。

A では今度女房に會つた時に打ち明けて見る氣はないか。

B そんな氣はありません。

A しかしお前がそれを打ち明けたら女房も少しは喜ぶだらうとは思はないのか。

- B きつと喜ぶだらうと思ひます、けれどもそんな事を打ち明けたらだんだん私は氣が弱くなつてしまひます、氣が弱くなつたら悪い事は出来なくなりません。
- A 悪い事が出来なくなれば結構ではないか。
- B いいえ困ります。私はさつきも云つたやうに悪い事はしたいのですから。悪い事をしないで居られないやうな人間に、神様が私を生んだのですから。
- A お前は女房の泣くのをみると、自分も善人になつたやうで好い氣持ちだと云つたではないか、するとその時は一時にもせよ「ああ悪かつた」と思つて後悔するのではないか。
- B 後悔するのではありません、後悔したつて始まらないと思つて居ます、ただその時だけちよいと好い氣持ちがするので、ほんの一時ですが、その氣持ちが捨て難いのです。まあ悪いことをする間の手のやうなものです。
- A その好い氣持ちと云ふのは、例へばどんな氣持ちなのか、それを出来るだけ、細かに説明して見よ。

B どんなと云つてちよつと説明する譯には行きませんが、前にも云つたやうに其の時だけ女房が非常に可愛く、いぢらしくなるので、それを見てゐるのが何だか好い氣持ちなのです。

A ではその時だけ女房の方がお杉より可愛くなるのか、

B さう……いや、さうではありません、——同じ可愛いのもお杉のと女房のとは少し違ひます。女房が泣くときは可愛いにちがひないのですが、お杉のやうに可愛いのではありません。可愛い具合が違ふのです、女房はお杉に比べれば器量もよくはありませんし、色が黒くつて、鼻が低くつて、體つきにもお杉のやうな意氣な婀娜つぽいところがちつともなくなつて、物の言ひつ節なんぞイヤに几帳面で、不細工で、私はあんな味もそつけない女はないと思つて居るのです。あの女の顔を見るとつくづくイヤ氣がさしてお座がさめるもんですから、可哀さうだとは思つてもやつぱりお杉の方へ行つてしまふのです。まあ不斷はそんな譯なのですが、それが泣く時になると其の色の黒いところや不意氣なところが……何だか斯う……急に不斷とは違つて来て、……何だか斯う……お杉などとは全く違つたきれいなものに見えて來るのです。

A その「きれいな」と云ふのはどんな風にきれいなのか、どんな風に不斷と違つて來るのか、説明しにくいかも知れないが、その心持ちをよく考へて云つて見てはどうか。

B まあたとへば、……あの女の眼はいつもは何となくどんよりして活氣と云ふものがちつともないんですが、泣くなると其れが涙で光つて来て、妙に生き生きとし来て、——かう云つてはをかしいかも知れませんが、水晶のやうにきれいになるんです、お杉の眼も非常に愛嬌がありますけれども、しかしあの女のあの時の眼のやうに清淨な光は持つて居ません。私はあの眼を見ると悲しくもなりますが、その悲しいのが好い氣持ちなので、胸のなかまですつと透き徹るやうになるのです。

A ではきれいだと云ふよりも清淨だと云ふのだな。

B さうです、清淨なのです。——どう云ふ譯か知れませんが、私はあの眼を見るといつも神様のことを考へます、やつぱり神様と云ふものは確かにあるんだと云ふやうな氣がするので、神様はきつとあの眼のやうに清淨な、氣高いものぢやないかと思ひます。——氣高いと云ふと妙ですが、女房は下らない人間ですけれどあの眼だけは氣高い氣がします。つまり女房には、——私やお杉のやうな悪人と違つてあれは善人ですから、——いくらか神様に近いところがある、それで泣く時には眼の中に神様のやうなところが現はれるのぢやないかと思ひます。さうなつて來ると眼ばかりでなく、外のところまでがみんな一度によくなつて來るので、不斷は一向取り柄のない顔だの姿だのがその眼と同じやうに氣高くなつて來て、何處を見ても不細工な

ところがなくつて大へん情愛が籠つてゐるやうに、實際不思議ですがさう見えて来るのです。そこへ持つて来て聲をしやくり上げながら、「どうか後悔して下さい、眞人間になつて下さい」つて云はれると、その聲が又いつもとは別で、細いきれいな、腸へ沁み通るやうな悲しい調子なので、たまらなく可哀さうのやうな、胸の中がきれいに洗ひ清められるやうな氣になるのです。

A 女房にさう云つて泣かれると、お前はいつも何と答へるのか。

B 「まためそめそ泣きやがる！ 好い加減にしねえかい」つて云つてやります、「いつ迄も居やがるんだ」と云つて横ッ面を張り倒してやることもあります。それはあんまりうるさいから意地になつて云ふことも云ふんですが、しかしさうすれば猶泣くことも分つて居るんです泣かせる爲めなのか止めさせる爲めなのか自分でもよく分らないんです。

A さうしてイヂメながらお前も一緒に泣いたりするののか。

B 女房はいくらイヂメてもイヂメるほど泣いて、しまひにはおいおい聲を出したりして、鼻を詰まらせながら掻き口説くのです。一番たまらない氣がするのは「ねえあなた、あたしを打つならいくら打つてもようござんすから何卒改心して下さい、お願いですから、……」つて云つ

て、涙が一杯たまつた眼でもつて私をちつと見上げる時です。女房の眼が一番氣高く清淨に見えるのはさう云ふ時です。それを見ると私は恐ろしいやうな悲しいやうな氣がして来るので、それをごまかす爲めにイキナリ女房の襟髪を掴んで引き摺り倒すんです。すると女房は倒れたまま矢張りしくしくといつ迄も泣いて居ます。私はそのしくしくとしやくり上げる泣き聲を聞いてゐるうちに、云ふに云はれぬしんみりした氣持ちになるので、つひホロリとして、泣いてはならないと思ひながら、泣いてしまふのです。

A その時お前はただ黙つて泣いてゐるののか、それとも女房にやさしい言葉でもかけてやるのか。

B 「もう泣くのは止してくれ、お前が泣くと己も涙が出て仕様がねえから」つて云つてやりません。「泣いて意見をしてくれらなあ有りがてえが、己はどうも斯う云ふ人間に生れついたんだから仕様がねえ、お前も嘸辛からうが夫婦になつたのが因果だと思つてあきらめてくれよ、な堪忍しろよ、」つて云つてやります。すると女房はうん、うんてうなづきながら一層哀れつぽくさめざめと泣き出しますが、私も何か云へば云ふほど涙が止めどなく出て来て、悲しい歌でも聞いてゐるやうに、一緒になつて好い心持ちに泣いてしまふのです。

A そこまで来たらなぜお前は後悔しないのだ。さう云ふ心持が長く續けば、善人になれるのではないか。

B でも長く續かないから仕様がなのです、その時はそんな氣持ちになつても、又直ちに悪い事をするのですから、泣くには泣いても決して改心するつもりではないのです。此れから先も生きて居る間は何度でも悪い事をするでせうし、何度でも女房を泣かせるだらうと思ひます。いつ迄立つても同じ事を繰り返すだけです。

A では女房の方でも矢張り駄目だと思ひながら泣いて居るのか、それともいつか一度はお前が改心する事を信じてゐるのか。

B それはきつと、自分の力で今に改心させて見せると、さう思つて居るんだらうと思ひます、さもなければああ根氣よくいつも泣いて意見をする筈がありません。そこがああ女のい所なのです。さう云ふ所があるから猶更可哀さうになるのです。

A しかし可哀さうだと思ふばかりで後悔しないのでは、一向罪滅ぼしにならないではないか。女房を泣かして置いて好い氣持ちがするだけでは何の足しにもならないと思ふが、……

B いいえ、それだけでもやつぱり何かの足しになります、好い氣持ちがしないよりは善いこと

です、何かあの世で救はれる頼りになります。年中悪い事をして居て時々女房に泣いて貰ふ、

その間だけは神様に會つたやうな氣持ちになる、たとへ、後悔すると云ふ所まで行かないにしても、「自分は悪人だ自分は悪い事をして居るのだ」と云ふことを忘れずに居られる、此れは私のやうな悪人に取つては大事なことです。私のやうな人間は、せめて自分は悪人だと云ふ事だけは忘れずに居なければなりません、さうでないと私は永久に罪滅ぼしが出来ないやうな氣がします。ですから私の女房は犬猫同然に扱はれては居ますけれども、あれが居るので私と云ふものが救はれるのですから、あれは非常に必要な人間なのです。

A すると、お前の女房は全くお前の爲めに生きて居る事になるのか。お前は自分の爲めばかりを考へて女房の爲めを考へてはやらないのか。

B 女房にしたつて私と云ふ人間を救ふことが出来れば、それが矢張り何かしらあの女の爲めになると思ひます。あの女が私のやうな悪人を捨てて、善人の男を亭主に持てば今のやうな苦勞がなく樂かも知れませんが、樂をするよりは人を救ふ方がいい事です、あれは善人ですからきつとさう思ふに違ひありません。人間は誰でも苦しむのが當り前です、私だつて苦しくない事はないんですから。

- A お前まへはその心持こころもちちを女房にようぼうに打ち明あけたくないと云いつたが、いつか一度いどは打ち明あける時ときが來くるとは思おもはないか。
- B いつか一度いどはさう云いふ時ときが來くると思おもひます、しかしそれは此この世よの事ことではないやうな氣きもします。
- A お前まへはあの世よと云いふものがたしかにあると思おもふのか。
- B たしかにあると思おもひません、なくては困こまると思おもひます。
- A なぜ困こまるのだ。
- B でも此このままでは、誰たれかに、——神様かみさまにだか、女房にようぼうにだか誰たれかに濟すまないやうな氣きがしますから。

(大正十年十月稿)

白狐の湯(一幕)

人物

角太郎

お小夜

お小夜の母

狐

仔狐

或る白人の女

その召使ひの老婆

或る白人の紳士

巡査

所 ある山奥の溪流のほとり

(まんなかに溪流がながれてゐる、河床に幾つもの大きな岩がごろごろしてゐるので水は見えないが、せせらぎの音がさらさらと聞える。兩岸は崖になり、その崖の間を細い山路が縫つて

ゐて、溪流の上に渡された丸木橋に通ずる。上手の路から丸木橋を渡つて舞臺の前の方の汀へ降りたところ、溪の水とすれすれに古い小屋が立つてゐる。それはその川の縁に湧く温泉の小屋で、下手に小ひさな窓があり、入口は川の方を向いて開け放されてゐるけれども、その近所に岩があるのと内部が暗いので湯の口は見えない。ただほんのりとうす白い湯煙が小屋の奥から軒をかすめて這つてゐる。)

(静かな初秋の夜である。流れに沿うた崖のふちには白萩がところどころに咲きこぼれてゐる。お小夜が温泉小屋の入口に近い岩の上に腰かけてしよんぼり川の方を見てゐる。暫くすると、一人の老婆——お小夜の母親——が、薪を背負つて下手の坂路を橋の方へ降りて来る。橋を半分渡りかけたとき、お小夜に気が付いて立ち止まる。)

母親 誰だあよ、そこに居るのは？ …おめえ、お小夜ではねえかよ……

(お小夜黙つてゐる。)

母親 まあ今時分……おめえはまあ……

(お小夜母親に顔を見られてばつが悪さうにうつむく。)

母親 夜がふけてからこんな所に来るんでねえ、来てはなんねえつてあれほどおつかあが云つて

るのによろ。おめえ、いつから此處に来て居るだあ？ よろ、いつからだあ？

お小夜 ……（何事をか云はうとして黙つてしまふ。）

母親 何？ 何だつてよろ？

お小夜 なんにも云やしねえよろ。

母親 云はねえ？ 云はねえだつて、おツかあにやあお前の腹は分つてゐるだあ。…さあ、早くけへんな、おツかあと一緒にけへんな。

お小夜 ……

母親 よろ、けへんなつて云ふによろ。それにまあ、おめへ内を空ッぽにしてどうする氣だあよ、おツかあは今日隣り村へ廻らなけりやあなんねえから歸りはおそくなるべえつて、今朝も斷つて置いたのによろ。ほんたうに呆れた兒だあ。——（間）さあ、一緒に來ねえかつてばよろ。

お小夜 まあ、おツかあ、…おいらは直きに後から行くよろ。

母親 いいやなんねえ、（空を仰ぐ）ほうら、もう月が榛木山のあの松の木にかかつてゐるだあ、おめえにはあれが見えねえのかよ。

お小夜 おいらだつて見えてゐるだあよ、おいらはあの月を待つてゐるんだもん、…

母親 あの月を待つてゐる？

お小夜 ああさうだあよ、月と一緒に來る人があるのを待つてゐるだあ。

母親 ふん、待つてゐたつて來る筈はねえよ、角太郎はもう大方死んぢやつただあ。

お小夜 死んぢやつたら死骸が出なけりやなんねえつて、みんなさう云つてゐるだあよ。角ちやんの兄さんの時だつて、姉えの時だつて、——ほれ、あの釣橋の下の方のよろ、眞つさをな淵の中に仰向けになつて、ちやんと死骸が浮いて出たつて云ふんだもん。

母親 そりやアあの時はさうだつたけれど、角の奴あ溪で死んだか山で死んだか分りやしねえもん、死骸だつて出るときまつちやあ居ねえだあよ。

お小夜 だつて、昔ツから此の村ぢやあ狐に憑かれた者があると、みんな溪へ落ちて死ぬんだつて云ふんだもん。さうしてしまひにやあ死骸になつて、あの淵へ浮かぶんだつて云ふんだもん、…

母親 さう云つたつておめえ、死骸が浮いて出るまでにや間があるだあよ、角の野郎が居なくなつてからまだ五六んちしかならねえもん。

お小夜 だからよう、まだ五六んちにしかなんねえんだから、生きてゐるかも知れねえのによ
う。

母親 五日も六日も、飯い喰はずに山の中に生きてゐられるかよう、いくら狐につままれたつ
て、……

お小夜 でも人間は、水さへ飲んでりやあ十日や二十日飯い食はねえでも大丈夫だつて、學校の
先生がさう云つただあよ。だから角ちゃんはまだ生きてゐるだあ。

母親 生きてゐたつて、そんな狐につままれた人間なんか、二度と我家へ入れることはなんね
えからなう。

(さう云つてお小夜を睨める、お小夜悲しげにうなだれる。)

母親 (橋を渡り、お小夜の傍に来て岩角に腰かけ、やさしい言葉づかひになる) ようお小夜ぼ
う、おめえはまあどうしてそんなに角の事ばかり案じるだあよ。おめえはまだ歳が若えんだし
なう、今に嫁に行く時分になりやあ、いくらだつて好い婿が貰へるだあよ。

お小夜 あれ、おツかあ、おいらあ何もそんな氣ぢやねえんだによう。……

母親 そんならなぜ角の事ばかり案じるだあよ、——さ、お小夜ほう、好い兒だから一緒にけえ

んな角の野郎は仕方がねえけれど、おめえの身にでも間ぢげえがあつちや、おらあほんとに佛
様に申譯がねえ。

お小夜 角ちゃんだつて、おツかあにやたつた一人の甥だのによう。

母親 いいや、おらああんな狐のついた人間を甥だと思はねえよ。あれの一家は代代狐にた
られてゐるだあ。あれのおふくろが死んだのも、兄あや姉えが死んだのも、みんな狐の業なん
だもん。

お小夜 狐がつくなんて、今の世の中にそんな事があるもんでねえつて、先生がさう云つただあよ
母親 いくら先生がさう云つたつて、角のする事が正氣の沙汰と思へるかよう。小さい時はそん
な風でもなかつたけれどな、奉公に出せばあの通り馬鹿になつて歸つて来るしよ、仕方がね
えから引き取つてやりやあ、始終山の中ばかりほつき歩いて、何一つ用を足した事もありや
しねえ。あれのおふくろが氣がふれた時も、ちやうどあんな風だつただあ。

お小夜 そりや、伯母さんの事は知らねえけれどな、角ちゃんのは狐がついたと云ふ譯ぢやあね
えだあよ。ただ少うし氣が變になつただけだあよ。だから親切にしてやれば今に直るかも知れ
ねえのによう。

母親 いいや、あれはただの氣ちげへぢやあねえ。——現におめえ、此の白狐の湯の近所でな、夜がふけてから彼が眞つ白な狐と一緒に歩いてゐるのを見たつて云ふ人が毎晩のやうにあるんだもんなう。

お小夜 おツかあが眞に受けるもんだから、みんなが面白がつて好い加減な事を云ふだあよ。そりやあ嘘にきまつてゐるだあ。

母親 いいや、嘘の譯はねえだあ、さきおととひの晩は千歳屋の旦那が見たつて云ふし、その前の晩は、お六さんとこの若え衆が見たつて云ふしやう、……

お小夜 そりやみんな神経だあ。

母親 神経ならそんなに幾人もおなじものを見る譯がねえだあよ。ゆうべもおととひも見た人があるんだもん、

お小夜 ほうれ、ゆうべ見た人があるつて云ふなら、角ちやんはまだ生きてゐるだあ。……だけどよう、見たらなぜ擱めて、つれて来てくれなかつたかやう。

母親 さう云つたつておめえ、夜中にこんな溪の底まで降りて来る者はありやしねえだあ。暗くなりやあ誰一人だつて、此の小屋の傍へなんか、おツかながつて寄りつきやしねえからなう。

お小夜 そんならみんな何處で角ちやんを見ただあよ？

母親 みんなほれ、(上手の崖の上を指す)あの往還の栗の樹の下を通る時にな、——彼處から此の小屋の近所が見えるだあよ。それになう、いつも狐が出る時は月夜にきまつてゐるだからなう。

お小夜 ……ほんたうにそんな事があるかしらなう、……

母親 おおあるともよ、おめへだつて、たびたび聞いてゐる筈だあにやう、——秋になつて、毎年此の萩の花が咲く時分になるてえとな、きつと狐が此處の湯へ這入りに来るだあ。ほれ、あの月が榛木山の此方側へ出て、谷間のやうに明るくなつて、此の小屋の奥へあかりがさし込む刻限になるとな、いつもきまつて狐が湯の中に漬かつてゐるだあ。

お小夜 誰がそんな事を云ひ出しただあ？

母親 誰がつて、昔ツから見た者は多勢居るだあ。湯がきれいだもんだから、それへ月の光が透き徹つてやう、そんな中に狐が眞つ白な毛なみを立てて、首つたまや腋の下をせつせつと洗つてゐるのが、まるで雪女のやうに物凄いつて云ふだあよ。それがあんまりきれいだからつて、つい釣り込まれて小屋ん中を覗きでもしたもなあ、それつきり氣が違つて狐つきになつちまふだ

あ。角のおふくろだつて兄あだつて姉えだつて、みんなそれでああなつただあ。

お小夜 ぢやあ角ちゃんも、夜になるとその狐を見に来るだかなう？

母親 ああさうだよ、毎晩毎晩、きつと此の小屋を覗きに來るだよ。——何でも見た人の話ぢやあな、あの栗の樹の高えところから見おろすんだから、此れつぼつちにしきや見えねえけれど、そりあ償つ白なきれいな狐が、體ぢゆう月に照らされて銀のやうに光つてな、すうツと此の小屋を出てその橋を渡つて行くだあとよう。さうすると又角の奴がきまつてその後にくツ着いてゐるツて云ふだよ。

お小夜 橋を渡つて、それからどけへ行くだかよう？

母親 大方此の溪の川上の方へ行くだよ、川上の方に狐の洞穴があるだよ、

(お小夜 仰いで空の月かげを見、それから川上の方をちつと見つめる。間。)

母親 さあ、お小夜ぼう、いつまで此處にかうしてゐるだあ、もう好い加減にしねえかよう。

お小夜 おいらあもう少し此處にゐるだあ。——

母親 おめえ、なぜそんな馬鹿を云ふだよ、ほれ、もう月が此方かたへ廻つて來ただあ。

お小夜 おいらあその月を待つてゐるだあ、さうして角ちゃんを連れて歸るだあ。おツかあは先

へけえつてくんろよう。

(次第に谷あひに月がさして來る。)

母親 おめえ、たまにやあ親の云ふこともきくもんだあよ。あんな野郎にかまつてゐると、今に

おめえも狐つきになつちまふだあ。

お小夜 なつたつていいつてばよう、放つて置いてくんろよう！

母親 まあ！ さう云つてもおめえは剛情な兒だなう。いいとも、云ふことを聞かねえならお巡りさんと呼んでくるから。

お小夜 どうとでも勝手にしたらいいだあ。

母親 さあ！ お小夜(彼女の手を取つて立ち上る) 立ちなよう！ …立ちなつたら！

お小夜 だつて、おツかあにやあ角ちゃん可哀さうでねえのかよう？ そんな無慈悲な了見で居りやあ、きつと自分の娘にも祟りが來るだあ。

母親 これ、馬鹿な事を云ふもんでねえつ！ さあ！ 立たねえかツて云ふによう！

お小夜 あれ、何するだあ！

(母親、無理やりにお小夜を引つ張つて丸木橋を渡つて行く。)

お小夜 ようおツかあ、後生だから放してくんろよう！
母親 いんやなんねえ、どうしてもおらあ連れて行くだあ。

お小夜 いやだつてばよう！ ようおツかあ、……

(兩人争ひながら上手の崖の路へ消える。「ようおツかあ、いやだつてばよう！」と云ふお小夜の泣き聲が暫く聞える。)

(長き間。月が谷あひを一杯に照らして、青白い光が温泉小屋の中にさし込む。蟲がぢいぢいと頻りに繁く啼き始める。しんとした静かさの中に、溪川の早瀬の音が際立つて居る。)

(川上の岩の間から角太郎の姿が現はれる。裾のちぎれた筒袖を着て、擦り切れた草履を穿いてゐる。岩の上を飛び飛びに傳はつて溪川を涉りながら、だんだん丸木橋の方へやつて來ると、ある岩角に足を滑らしてぼつたりと俯伏しに倒れる。そして倒れたまま、體を平べつたく地面につけて、ぢつと死んだやうに動かない。)

(やや長き間。蟲の聲。早瀬の音……)

上手の崖を、お小夜がこつそりと後ろを見返りながら下りて來る。丸木橋を渡つて、恐る恐る温泉小屋の傍まで行き、中を覗いて見ようとする、が、月の光が物凄くさし込んで居るので怯

氣がついたらしく、小屋の周りを一とまはり廻つて見てから、今度は下手の窓に取り縋つて覗かうとして、又暫く躊躇する。そして結局覗く氣になれないで、橋の上へ戻つて來てきよるきよるとあたりを見廻し、戀ひしさうに川上の方を眺める。と、角太郎の姿に氣が付つてきよつとして橋を飛び降り、その方へ近寄つて行く。)

お小夜 まあ角ちゃん、お前はまあ、そんな所に寝ころんで、何してゐるだあ。よう？ 角ちゃん、……角ちゃんてばよう！

(角太郎の傍に寄り添ひ、抱き起しながら、)

お小夜 まあ、着物も何もこんなに濡れてゐるだあよ。……

(お小夜、角太郎を岩角に腰かけさせ、着物の裾をしぼつてやる。角太郎はぼんやりして、我を忘れてゐるものやうにうつろな眼つきであたりを見廻して居る。)

お小夜 角ちゃん、お前まあ、此の間から三日も四日も何處へ行つてゐただあよ？ 己あどんなに心配したか知れねえのに。……(ぢつと、氣味悪さうに顔を見入る) よう、角ちゃんてば！

しつかりしてくんろよう！ ……お前、お腹が減つて歩けねえぢやねえの？ 歩けねえなら己が負ふつて行つてやるから、さあ、一緒に家へ歸らう。……歸らうよ角ちゃん。

角太郎 (お小夜の手を拂ひのけながら) いやだよ己あ、内へは歸らないんだ。(云ひながら猶

もキヨロキヨロする)

お小夜 なぜ? なぜだよ?

角太郎 己あお前のおツかあは意地が悪いから大嫌ひだあ。

お小夜 そんな事はあるやしねえよ、——おツかあだつてお腹の中ぢや角ちゃんの事を案じてゐるだあ。角ちゃん又狐にでもつままれたんぢやねえかつて云つてな、さつきも此處へ尋ねて來ただあ。……

(温泉小屋の内部がぼらツと一層青白く明るくなる。角太郎はいつの間にかその小屋の方へ眼を据ゑて、お小夜の言葉が全く耳に入らないかのやう、……瞳の色が次第に怪しく鋭くなる。)

お小夜 (慄然としながら) 角ちゃん、お前何を何を——見てゐるだあね?

角太郎 ああ、あれ、あんなに月がさしてゐるぢやないか。あれを御覽、あの小屋に月がさしてゐるのを、——(云ひながら物に惹き寄せられるやうにふらふらと歩き出し、橋へ上つて小屋の方へ近づく)

お小夜 (同じく橋の上を追つて行き、やるまいとして手を捕へる) あれを見るんぢやねえ、見

ちやあいけねえよ角ちゃん、——

角太郎 いいや、己あ彼處へ行くんだ、あのお湯の中にもうあの人が來てゐるんだ。

お小夜 あれ、角ちゃん、お止しッたらよう! 今時分あんなところに誰も人なんか居やしねえ

だあ。

角太郎 いいや、居る、居る、——ほら、(橋の上から透して見る) あすこに白いものがちらちらしてゐる。——ほら、あすこに人が居るぢやないか。(更に小屋の方へ近づく)

お小夜 (さう云はれて其の方をちらりと見、ぞつとしながら) うそだよ、角ちゃん、ゐやあしねえよ。——己あさつきから此の小屋の近所にゐただあけれど、だあれも來やあしなかつただもん。……

角太郎 だつて己にはちやんと見えてゐるんだ。毎晩毎晩月があのお湯の中へさす時分に、きつとあの人が來てゐるんだ。ゆうべの晩も、おととひの晩も、ちやうど今時分に己あ見たんだ。

お小夜 うそだよ、そんな事がある筈はねえ。

角太郎 うそぢやあない、——うそだと思ふなら己と一緒に來て見て御覽。……(又透かして見

る)ほら、もう居る、居る、ほら、あの人が着物を脱いで、裸體になつたよ、：：ほら、今お湯へ漬かつたよ。眞つ白な體に月がうつつて、：：よう、お小夜ちゃん、あれを御覽よ。

お小夜 (強ひて見まいとしながら) 角ちゃん、後生だから見るんぢやねえよ、そりやあきつと狐だあもの。

角太郎 馬鹿をお云ひ。ありやあ人間だよ。己はあの人をよく知つてゐる。己は神戸にゐる時分にあの人を見た事があるんだ。

お小夜 そりやあ狐だよ、——狐に違えねえだよ。

角太郎 誰がそんなことを云ふんだ？

お小夜 おツかあがさう云つただよ。——おツかあばかりか、みんな村の人がさう云つてゐるだあ。月がさす時分にあのお湯を覗くと狐が居る、さうしてな、その狐を見た者はみんな狐つきになるだから、決して見ちやあなんねえツて。

角太郎 あははは、村の奴等はみんななんにも知らないんだ。ありやあ狐ぢやあないんだよ、——お小夜ちゃん、お前にだけは己の内證で教へてやるがな、あれはほれ、稚兒ヶ淵の崖の上のな、あの別荘に泊つてゐる西洋人の女なんだよ。

お小夜 (悲しげに角太郎を見る) うそだよ角ちゃん、あの異人さんが今時分こんな所へ来る筈はねえ。角ちゃんの氣の迷ひだよ。

角太郎 西洋人と云ふ者はね、人にお湯へ這入るところを見られるのが嫌ひなんだよ。だから今時分、だあれも居なくなつてから此のお湯へやつて来るんだ。：：

お小夜 だつて、あの別荘にはお湯が引いてあるんだもん、こんな所へわざわざ這入りに來ねえだつて。

角太郎 でもあの人には悪い病氣にかかつてるんだよ、その病氣が此處のお湯へ這入らなけりやあ直らないもんだから、そうツと人に知れないやうにやつて来るんだよ。村の奴等だあれも氣が付かないんだけど、己あちやんと知つてゐるんだ。

お小夜 (半信半疑になる) それを角ちゃんはどうして知つてゐるだよ？

角太郎 あの人にはな、己の奉公してゐた店のな、直き近所の古い大きな西洋館に住んでたんだよ。：：ああ、己はよく知つてゐる、：：その家にはまだ二三人異人の女が住んでゐてな、夜になると紅い着物や白い着物を着て、みんな綺麗にお化粧をしてゐたんだよ。：：だけどあの人はそのから病氣になつちやつたんだ、そして長い間わづらつてゐたんだ。

お小夜 だつてあの異人さんはちつとも體なんか悪かねえよ。夕方になると、谷い越えたり、川あ渡つたり、いつもてくてくと獨りで山路を歩いてゐるだあ。女のくせによくまああんなに活潑に歩けるツてよう、みんな感心してゐるだあもの。

角太郎 そりやあ每晚此のお湯へ這入りに来るから、だんだん直つて來たんだよ。此の夏からずうつと此處にゐるんだもの。——體がよけりやあんなに寒くなつて來たのにいつまでも此處に居やあしないよ。もう何處の別荘にだつてだあれも居やあしないぢやないか。……

(お小夜がちつと考へてゐる隙に角太郎はふいと橋を飛び越えて行く。)

お小夜 (あわててその跡を追ひ、小屋の前へ来て又手を捕へる) 角ちゃん、角ちゃんてば!

角太郎 已ああの人に用があるんだよ。お前いやなら彼方へ行つといで! よう、お小夜ちゃん、彼方へ行つといで! (云ひながら小屋の中を覗かうとする。お小夜引き止める) なぜお前は邪魔をするんだ。

お小夜 だつて……もし狐だつたらどうするだあ、……

角太郎 (一と目小屋の中を覗く) ローザさん、ローザさん、……僕ですよ、洋服屋の小僧の角太郎ですよ、……

お小夜 あれツ、角ちゃん、止してくんろよう!

(云ひながら無理やり下手の方へ引つ張つて行く。)

角太郎 (引つ張られながら小屋の窓にしがみつき、伸び上つて中をのぞく) あれ、居る、居る、

ローザさん、……

お小夜 これ、角ちゃんたら! (つい一緒にのぞかうとして、やはり恐いのでぞけない) ほうれ、だあれも返辭をしやしねえだあ、人なんかあやしねえだあよ。

角太郎 ローザさん。……ローザさん、……

お小夜 さあ、早く歸らうよ角ちゃん、お前氣が違つたんだあよ。

角太郎 あれ。あすこにちやんと居るぢやないか。……あれ、あれを御覽。……ローザさんがせつせと體を洗つてゐる。……ああ、お湯の中に月があんなにさしてゐるよ。湯壺がまるで水晶のやうに透き徹つて、……ローザさんの體ぢうが雪のやうに照つてゐるよ。雪ぢやあない、銀だ。銀のやうに眩しくきらきら光つてゐるんだ。……ああ、今髪の毛をさらさらとしごいてゐる。……あれ、あれを御覽。……ローザさんの髪の毛が、金色の髪の毛が、お湯の中で月に映つてゐるぢやないか。あんな綺麗なものが……あれでも人間の髪の毛なんだよ……

お小夜 (見ようとしては躊躇しながら) そりやみんな角ちゃんの氣の迷ひだあよ、そんなものが見える譯はねえよ、……

角太郎 あれ、もう髪の毛を解いちやつたよ、……今度は腕を洗つてゐるよ、ああ、ローザさんは腕のおできを洗つてゐる。ローザさん、ローザさん、そんなにそこをお湯へ入れても泌みはしないの? ……まあ何と云ふきれいなおできだ。紅い血うみがお湯の中でつやつやとして、まるで白いびろうどの上にルビーの玉がきらきら光つてゐるやうだ。……ああ、あれ、腕ばかりぢやない、脚にも一つ、肩にも一つ、……あれはおできぢやないのかも、知れない、きつとほんたうのルビーなんだ。だからあんなに光つてゐるんだ。……お小夜ちゃん、あれを御覽よ、あの眞つ白な襟頸を御覽よ、あれでも人間の肌なんだよ。……

(お小夜、再び幾度かためらつた後遂に角太郎に誘惑されて恐る恐る窓に取りつき、中を覗いて見る。同時に「あッ」と云つて身の毛のよだつやうな様子で、直ぐに首を引つ込める。)

お小夜 (眞青になつてふるへながら、逃げるやうに小屋の傍を離れる) あ、あ、あれは、き、き、きつねだ。狐だあよ角ちゃん! ……お、おらあ、狐を見ちやつただあ。

角太郎 ああ、もうすつかり洗つちやつた。タオルで體を拭いてゐる。ローザさん、ローザさ

んもう上るんですか? 上るんなら僕がお迎ひに行きますよ。……

お小夜 角ちゃん、そりやあ人間ぢやあねえ、……眞つしろな狐だあよ、やつぱりおツかあが云つた通りだあ。……己あお巡りさんと呼んで来るよ。

(云ひ捨てて飛ぶやうに丸木橋を渡り、上手の山路へ走り去る、)

角太郎 ……もう體を拭いちまつた、あれ、あれ、着物を着てゐる。タオルで拵へた眞つしろな着物を着てゐる、體も着物もみんな眞つしろで、何だか雪の精のやうだ。……ああ、又湯壺の縁へ行つて。しやがんどまつた。あれ、あれ、ローザさんの姿がお湯の上へ映つてゐる。お月さまよりも青白く、ぼりつと明るく映つてゐる。……ああ分つた、ローザさんは鏡を忘れて来たんですね? それで水鏡をしてるんですね? ああ、髪を結つてゐる。濡れた髪の毛からぼたぼたと雫が落ちる。……おや、もう髪を結つちまつた。タオルをしぼつて、足を拭いて、白襦子の靴を穿いてゐる。……ローザさん、もう支度が出来たんですか。出て来るんですか。僕はお迎ひに来たんですよ。……(云ひながら小屋の戸口の方へ廻る) ああ出て来た、出て来た、ローザさん!

(小屋の中から、白人の女に化けた狐が出て来る。白いタオルの浴衣を着て、素足に白襦子の

靴を穿き、石鹼の箱とスポンジとタオルを入れた籠を提げてゐる。狐が小屋を出ると共に小屋の中に充ちてゐた青白い月明りのやうなものが、始終狐の跡を追つてその身の周りを照らして行く。

(白人の女の姿を見ると、角太郎は思はずその美に打たれたやうな風になつて、黙つて二三歩後へさがる。狐ちらりと角太郎を見、すうつとその前を通り過ぎつつ橋を渡りかける。)

角太郎 (遠慮しながら) もし、ローザさん、ローザさんあなたはローザさんぢやないんですか?

狐 (橋の途中で振り返り、西洋人らしい日本語で) ええ、さう、……わたしローザです、あなた誰? ——誰ですか?

角太郎 僕ですよ、——あの、神戸の洋服屋の中村にゐた小僧ですよ。

狐 おおさう、あなた。テイラーの中村にゐました?

角太郎 ええ、ゐました。僕はあすこに三年ばかり奉公をしてゐました。さうして始終ローザさんのところへ洋服を持つて行つたんですよ。ローザさんはいろんな服を澤山持つておいででしたね。ほら、二階のつきあたりのローザさんの部屋へ行くと、白い色をした鏡のついた筆筒が

あつて、——寢臺の横にそれが二つ列べてあつて、——中に一杯服がしまつてありましたつけね。ねえローザさん、僕はちやんと覚えてゐますよ。

狐 ああ、……そしてあなたの名前、何と云ひますか?

角太郎 僕は角太郎つて云ふんですよ。

狐 おお角太郎、——わたし知つてゐます、あなた、あの時のボーイですね。

(云ひながら橋を戻つて来て角太郎の顔を見る。)

角太郎 ローザさんは僕を大そう可愛がつてくれましたつけね。角太郎さん角太郎さんて、行くたび毎に僕の頭を撫でてくれて、よく銀紙に包んであるチョコレートくれましたつけね。

狐 さうです、さうです、わたしあなたにチョコレート上げました。あなた大へん伶俐なボーイでした。わたし決して忘れません。(岩角に腰をかけながら) あなた、なぜそこに立つてゐますか。一緒に此處へおかけなさい。

角太郎 ええ、ありがと。ありがとございます。(うれしきうに並んで腰かける)

狐 角太郎さん、——そしてあなた、どうして此處へ来てゐますか。

角太郎 僕ですか、僕はあの、神戸に奉公してただけけれど、氣ちがひでもないのに氣が違つた

んだつて云はれて、こんな田舎へ追ひ歸されてしまつたんです。

狐 あなたのパバやママの家、此の田舎にあるんですか？

角太郎 いいえ、僕のお父さんやお母さんはもう死んぢまつたんですよ。だから仕方ないもんだから、伯母さんの家へ歸つて來たんです。

狐 おおさう、あなた伯母さんの家にいます？

角太郎 いいえ、もうその家も出ちまつたんです。僕はあの婆あが大嫌ひなんだもの、——意地が悪くつて、毎日毎日僕を叱つてばかりゐて。——

狐 それならあなた、今何處にいます？

角太郎 僕の家は何處にもありません。晝間は森の中だの山の中だのに隠れてゐて、夜になると此の谷へ出て來るんです。……ローザさん、僕はね、あなたが毎晩このお湯へ入らつしやるのをちやんと知つてゐたんですよ。さうしていつでもあなたのお姿をそうつと蔭で見つてゐたんですよ。

狐 おお、あなた毎晩此處に來ました？ きのふの晩もおとこの晩も？

角太郎 ええ、きのふの晩もその前の晩もその前の晩も、僕はいつでもあなたがお湯にお這入り

になるのを見てゐました。僕は小さな聲で、ローザさんローザさんて、あなたをあんなに呼んでくれどけふまで一度も返辭をしては下さらなかつたんですね。

狐 おお、さうわたし知りませんでした。ほんたうに濟みません。角太郎さん、あなた、堪忍してくれませんか？

角太郎 僕はどうしてローザさんが返辭をしてくれないのかと思つて、悲しくつてなりませんでした。でももうそんな事は何でもありません。僕は今夜はうれいんです、かうしてローザさんと二人ツきりで話をする事が出来るんですもの。——かうしてゐると、僕は神戸にゐた時のことを想ひ出しますよ、ねえ、ローザさん、あなた覚えておいでですか？ あなたのお部屋へ僕がたびたび使ひに行つた時分のことを？

狐 ええ、覚えてゐますよ。わたしあなたにチヨコレートを上げましたよ。

角太郎 あなたのお部屋にはきれいな物が澤山飾つてありましたつけね。繪だの寫眞だのいろいろな切れたのが、……さうしてあの、緑色の幕のかかつた窓のところに鳥籠が下つてゐましたつけね。籠の中にカナリヤがゐりましたつけね。

狐 ああ、……あなた、ほんたうによく覚えてゐますね。

角太郎 僕はあのカナリヤが羨ましかつたんですよ。……

狐 なぜ？ なぜですか？

角太郎 だつて、あのカナリヤは、朝でも晩でも、始終ローザさんの傍にゐられるんですよ。さうしてローザさんの優しい手から餌を喰べさせて貰へるんですよ。……

狐 あなた、それほど私が好きでした？

角太郎 ええ、僕はローザさんが大好きでした。あなたのお部屋へ使ひに行くのが何よりも楽しみでした。ローザさんはよくピアノを弾いて、唄をうたつておいででしたね。一度僕がお部屋へ行つたら太つた髯の生えた水兵のやうな服を着た西洋人が傍にゐて、一緒に唄をうたつてましたね。ローザさんはあの時僕を叱りましたね。——「黙つて此處へ這入つて来ちやいけないよ」ッて、怖い眼をして僕を睨めて、——

狐 私が怖い眼をしました？ そんな事がありました？

角太郎 ええ、——それから後も二度ばかりありましたよ。その時は水兵のやうな人ぢやなくつて、ケリー商會の旦那と二人で、ローザさんはお酒を飲んでおいででしたね。あの時も僕はあなたに叱られました。「今お客さまがあるんだよ、用があるなら後におしよ」ッて、さう云ッ

て、——僕はローザさんに叱らしたのが悲しかつたもんだから、今でも忘れずにゐるんですよ。

狐 ああ、角太郎さん、堪忍して下さい、堪忍して下さい。わたしあなたにお氣の毒しました。

——けれどもわたし籠の中のカナリヤと同じことでした。わたしあなたが好きでしたけれど、あの水兵やミスター・ケリーと仲好くせねばなりません。さうしなければわたしも矢張り意地の悪いお婆さんに叱られました。わたし自分で、自分の體が自由になりませんでした。ね、あなたに分つてゐたでせう？

角太郎 ああ、それがやローザさんは、ほんたうは僕が好きだつたんですか？

狐 ええ、わたし一番あなたが好きでした。わたし、ほんたうは、あの水兵もミスター・ケリーも嫌ひでした。けれど仕方がありませんから、一緒に唄をうたつたりお酒を飲んだりしてゐました。

角太郎 ローザさん、僕はあなたのハンケチを持つてゐますよ。（懐ろから絹の蔷薇色のハンケチを出す）ほら、これを御覽なさい。いつかあなたが此れをお前に上げると云つて下すつた、あのハンケチなんですよ。

狐 ああさう、さうです、わたしあなたにそのハンカチーフ上げました。あなた今でも持つてゐますね。

角太郎 此のハンケチの隅のところにKと云ふ字とRと云ふ字が書いてありますね。

狐 ああさう、(ハンケチを手を取つて見る)——あなた此れが分りますか？ 此のRと云ふ字、ローザのことです。そして此のKと云ふ字、角太郎さんのことです。

角太郎 でも店の者にこれを見せたら、Kと云ふ字はケリーさんのことだつて云ひましたけれど、……

狐 いいえ、ちがひます。あなたのことです。わたしあなたに、此の字を縫つて上げました、わたしあなたが好きでしたから。……

角太郎 きつとさうかも知れないつて、僕はさう云つただけけれど、そんなことがあるもんか、だからお前は氣違ひだつて、みんなが僕を馬鹿にしました。僕はみんなに笑はれたり、からかはれたりしたんです。

狐 おお、みんながあなたをからかひました？

角太郎 ええ、さうですよ。今でも僕を狐つきだつてみんなさう云つてゐるんですよ。——村の

奴等はね、ローザさんがこのお湯へ来ることをだあれも知らないもんだから、夜おそくなつてからこんな所へ来る者はない、そりやあきつと人間ぢやあない、狐だ狐だつて云ふんですよ。

狐 おほほほ、(甲高く笑ふ) 私のことを狐だと云ひますか？

角太郎 ええ、さうなんです、ローザさんがあんまり色が白いもんだから、あんなきれいな人間がある譯はない、あれは狐だつて云ふんです。

狐 おほほほ、をかしいですね、わたし狐ではありません。わたしローザ、ね、あなたよく知つてゐますね。

角太郎 ええ、知つてますとも。——僕はあなたがあの別荘へ入らした時から、きつと體が悪いので此の温泉へ這入りにおいでになつたんだと、さう思つてゐたんですもの。——ねえ、ローザさん、あなたもうすつかりお直りになつたんですか？

狐 わたし、もうすつかり直りました。此の温泉はほんたうにいい温泉です、悪い病氣みんな直ります。ほら、(手頸のあたりをまくつて見せる)わたしの腕、こんなにきれいな、ね、此の通りこんなにきれいな。

角太郎 でもあの、肘のところにおできが出来てゐましたつけね。ほんたうにきれいな、ルビー

のやうな美しいおできが、……

狐 おほほほ、これ、これですか。(肘の方までまくつて見せる) これおできではありません、これほんたうのルビーです。おできのやうに見えますけれど、わたし此處へルビーを入れて、みんなを欺してやりました。——これ、よく觸つて見て下さい。これ、分りますか?

角太郎 (觸つて見る。びろろどのやうに細かい毛の生えた白い肌がきらきら光つて、そこにほんたうのルビーが腫物の膿のやうな工合に嵌まつてゐる) ああ、ルビーだ、ルビーだ、ほんたうのルビーだ。やつぱりおできちやなかつたんだ。

狐 おほほほ、

角太郎 まあ、何てきらきらよく光るんだらう? ローザさん、あなたの肌へ若しほんたうのおできが出来てもきつと此のルビーのやうにきれいでせうね?

狐 おほほほ、わたし、ここにもルビーを嵌めてゐます、これ、見て下さい、(云ひながら今度は脛を出す。そこにも白びろろどのやうな毛が生えて、ルビーが光つてゐる)

角太郎 (彼女の前に跪き、白繻子の沓を穿いた足を自分の膝の上にのせ、又そのルビーに觸つて見る) ああ、ほんたうだ、此れもルビーだ。まあ、何と云ふ可愛いきれいな沓なんだらう。

狐 おほほほ、おほほほ、(立ち上る) さあ、角太郎さん、わたしもう歸ります。あなたわたしと一緒に來ませんか? あなた、泊まる家がないならば、わたしあなたを連れて行きます。わたしの生れた美しい街へ連れて行きます。——

角太郎 ああ、ローザさんの生れた街はきつと美しいでせうね。どうか僕をつれて行つて下さい。ローザさんはいつその街へお歸りになるんですか?

狐 今夜、——今夜歸ります。

角太郎 今夜? ——でもローザさんは佛蘭西の方ぢやないですか?

狐 ええ、さう。わたしの國ふらんす、——わたし巴里で生れました。

角太郎 巴里で? ——だけど巴里へ行くのには汽車に乗つたり船に乗つたり、幾日も幾日も旅をするのぢやありませんか?

狐 いいえ、汽車にも乗りません、わたし歩いて巴里へ行きます。わたしよく道を知つてゐます。巴里は彼方、(川上の方を指さす)——彼方にあります。此の川の中を何處までも何處までも上つて行きます、そしたら直ちに巴里へ着きます。角太郎さん、あなた私と一緒に行きませんか? (肩へ手をかけて云ふ) さ、わたしあなたをつれて行きます、そして大事にして上げま

狐 おほほほ、おほほほ、(立ち上る) さあ、角太郎さん、わたしもう歸ります。あなたわたしと一緒に來ませんか? あなた、泊まる家がないならば、わたしあなたを連れて行きます。わたしの生れた美しい街へ連れて行きます。——

角太郎 ああ、ローザさんの生れた街はきつと美しいでせうね。どうか僕をつれて行つて下さい。ローザさんはいつその街へお歸りになるんですか?

狐 ええ、さう。わたしの國ふらんす、——わたし巴里で生れました。

角太郎 巴里で? ——だけど巴里へ行くのには汽車に乗つたり船に乗つたり、幾日も幾日も旅をするのぢやありませんか?

狐 いいえ、汽車にも乗りません、わたし歩いて巴里へ行きます。わたしよく道を知つてゐます。巴里は彼方、(川上の方を指さす)——彼方にあります。此の川の中を何處までも何處までも上つて行きます、そしたら直ちに巴里へ着きます。角太郎さん、あなた私と一緒に行きませんか? (肩へ手をかけて云ふ) さ、わたしあなたをつれて行きます、そして大事にして上げま

すよ、ね、一緒に来ませんか？

角太郎 (うなづきながら立ち上る) ローザさん、僕はあなたに何處まででも附いて行きますよ。ほんたうに僕を可愛がつて下さいな。

狐 おお、好い兒、好い兒、あなたほんたうにナイス、ボーイ。巴里のわたしの家へ行つたら、わたしあなたにいい着物きせて上げます、うまい御馳走毎日たくさん喰べさせて上げます。さ、あなた、早く行かねばなりません。

(上手の岸に生ひ茂つてゐる萩の花がざわざわと鳴つて、花の下にべつたりと身をひれ伏して隠れてゐた二匹の仔狐が現はれる。白繻子のやうにピカピカ光る美しい縫ひぐるみを着てゐる。そして、ひよいと丸木橋の上へ跳んで出て、親狐の方を見てびよこびよこお辭儀をする。)

仔狐の一 ローザさん、ローザさん、

仔狐の二 角太郎さん、角太郎さん、

仔狐の一、二 あなたがたをお迎ひに参りました。

狐 おお、(角太郎を顧みて)あの人たち、わたしのうちの女中です、わたしたちを迎ひに来ました。

(さう云つて、ちよつと仔狐に眼くばせする。)

仔狐の一 角太郎さん、角太郎さん、お腹が減つて歩けないならわたしが負ぶつて上げませう。

仔狐の二 川にはごろごろ石があつてころぶと危うございます。二人で抱いて行つて上げませう。

(仔狐どもすると角太郎の傍へ寄り、一匹は首を持ち、一匹は脚を持つて高く胴上げをしながら、親狐と共に橋の中央を駆けて来る。角太郎はいつの間にか失心したやうになつてゐる。)

狐 うまく行つたね、(狐のやうな恰好をして)こん、こん、こん、

仔狐の一、二 (角太郎を上下に揺す振りながら)こん、こん、こん。

(ついて一同溪川へ跳び下り、親狐を先に立てて、角太郎を引つ擔いだまま岩の間を乗り越え乗り越え、川上の方へ見えなくなる。)

(やや長き間。上手より提灯を持った巡查、お小夜、母親の三人が下りて来る。用心深くあたりを見廻しながら温泉小屋の方へやつて来る。)

お小夜 (橋の上から小屋の方を見て)角ちゃん、伊ちゃんたらよう、返辭いしてくんろよう！

母親 なあに、もう居やしねえだあよ、きつと狐にさらはれてしまつただあ。

巡查 (小屋を覗き、周りを一とまはり廻つて見ながら) 何處へ行つたか、もう此の近所には居らんやうだね。

お小夜 (川上を向いて) 角ちやん、角ちやんたらよう！ 何處へ行つちまつたんだあよう！

巡查 (お小夜に) お前、たしかに此處で狐を見たと言ふんだね？

お小夜 ああ、己あたしかに見ただあよ。それ、その小屋の窓のところで角ちやんと己が中を覗いて見るてえとな、眞つ白な大きな狐がお湯に漬かつてゐただあよ。

巡查 ふむ、(考へる)

母親 だからおツかあの云はねえ事ぢやねえんだによう。こんなところに居てはなんねえつて、あれほどにおツかあが云つたあのによう。

お小夜 (再び川上に向ひ) 角ちやん、——角ちやんてばよう、——

母親 そんなに呼んだつて、もうあの野郎は歸つちやあ來ねえだあ。さあ、お小夜ぼう、もう歸らうよ、(巡查に) 旦那、ほんたうにまあこんな夜更けに、濟まねえことでござえました。

巡查 どうだね、もう少し川上の方を捜して見ようかね。

母親 いいえ、もうそれには及ばねえだあ、あの野郎は私はとつくにあきらめて居ますだあ。

(下手より白人の女、輕快な散歩姿で紳士と腕を組みながら山路を降つて来る。召使ひの老婆がそのあとについて来る。お小夜等のうろろしてゐる様子を見ながら行き過ぎようとする。)

巡查 (ちよつと躊躇した後、老婆に聲をかける) もし、もし、

(白人等の一行、橋の上で立ち止まる。)

巡查 あの、失禮ですが、あなた方はこんなに晩くどちらへおいでになりましたね

老婆 (面をふくらせながら) あたしはね、うちのお嬢さんが此の旦那と(紳士をさす) 夕方散

歩に出てつたきり、大變歸りがおそいもんだから迎ひに行つて來たんですよ。

巡查 はあ、成る程、——そしてどの方面を散歩して居られたのかね？

(二人の白人、うるさい事を尋ぬる奴だと云ふ顔つきで聞いてゐる。)

老母 あんまり月がいいもんだから此の山の上の湖水の廻りを歩いてゐたつて、さう云つてゐますかね。全體何だつてそんな事を聞くんですよ。

お小夜 (岩の上に落ちてゐた絹のハーケチに心づき、それを取り上げて巡查の方へ持つて來ながら) ああ、ここに角ちやんのハンケチが落ちてゐただあよ、角ちやんはな神戸にゐる時分に此

のハンケチをローザさんに貰つたんだつてさう云つてな、肌身放さずに持つてみただよ。

白人の女 (ローザと云ふ名をきくと同時にふと気がついて、ツカツカと傍へ寄つて来て巡査の手にあるハンケチを見る) おお、これ、これ私のものです、わたし神戸で此のハンカチーフ盗まれました。(強き語調で) 誰が此れを持つてましたか?

老婆 まあ、ローザさん、ほんたうに此のハンケチだよ。これ御覽なさい、ここにRとKと云ふ字がちやんと書いてあるぢやないか。ケリーさん、記念のハンケチが出て来ましたよ。

白人の紳士 おおさう、わたくし大へん喜びます。(同じく傍へ寄つて) おお、これに違ひありません、これ、どうして此處にありましたか? わたくし不思議に思ひます。

老婆 (思ひ中つたと云ふ顔つき) ああ、きつとあの小僧が盗んだんだよ、彼奴の仕業だ。……

まあ、ほんたうに薄ッ氣味の悪い、厭な小僧だつたらありやしない。(巡査に向つて) あなた方はあの、此の頃此の近所をうろついてゐる薄馬鹿のやうな小僧があるのを知りませんか? もと神戸の洋服屋に奉公をしてゐた、――

巡査 ええ知つてゐます、あれは狐つきでね、毎晩この小屋の近所をうろついてゐたんです。

老婆 ああ、彼奴ですよ。毎晩毎晩うちのお嬢さんが此處のお湯へ這入りに来るのを知つて居て

ね。ゆうべも此の近所をうろろして、跡を追ひかけて来たとか云つて、もうお嬢さんは氣味悪がつてゐたんですよ。

巡査 それで今夜も此のお湯へお這入りになつたんですか?

老婆 いいえ、ゆうべで懲り懲りしちまつたんで、今夜は這入りませんでしたよ。それにもう、病氣の方も大分よくなつて来ましたので、明日は神戸へ歸ると云ふのでね、此の旦那あ迎ひかたがた遊びに入らしつたんですよ。

巡査 ああ、さうですか、それでよく分かりました。では此のハンケチはそちらへお返し申します。

白人の女(横柄から黙つて受け取り、紳士を見ながら) レット、アス、ゴウ、――(巡査に) 左様なら、

巡査 左様なら、失禮しました。

(白人の女、再び紳士と腕を組みつつ、老婆をつれて上手の山路へ去る。三人ぼんやりして後を見送つてゐる。短き間。)

(やがて。遠くの川上の方に一點の灯かけが見え、微かに叫ぶ人聲が聲える。)

人聲 おうい、みんな此方へ来いよう！ 角ちゃんが死んでゐるだよ。

お小夜 え！ 角ちゃんが死んでゐる？
（云ひながら夢中で川の中へ飛び降り、川上の方へ走つて行く。巡查と母親つづく。）
人聲 （灯かげと共にやや近くなり、ハッキリ聞える）おうい！ 早く来いよう！ 角ちゃんが死んでゐるだよ！
稚児が淵に死體が浮かんでゐるだよ！
（三人の姿が川上の方へ次第に消えて行く。）

幕

愛すればこそ（他三篇） 完

（福山製本）

昭和七年十月十八日印刷
昭和七年十月廿二日發行

改造文庫 第二部 第八十三篇
愛すればこそ（他三篇） 定價三十錢

著者 谷崎潤一郎

發行者 山本三生

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

版權
所有

發兌

東京市芝區新橋
七丁目十二番地

改造社

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二四番

株式會社秀英會印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犠牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみが藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級的全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆の一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

改造文庫第一部目録

富國論(上卷)	アマム、スミス著 竹内謙二譯	8	古代社會(上卷)	モルガン著 荒畑寒村譯	5	共産主義小兒病	レイニン著(近)
富國論(中卷)	アマム、スミス著 竹内謙二譯	6	古代社會(下卷)	モルガン著 荒畑寒村譯	5	農村問題	レイニン著(近)
富國論(下卷)	アマム、スミス著 竹内謙二譯	6	エミール(上卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	勞働組合論	藤井米藏譯
人口論	ロバート・マルサス著 マルサス著(近)	1	エミール(下卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	幸徳秋水集	幸徳秋水著
經濟學原理	デビッド・リカード著 リカード著(近)	1	金融資本論	猪俣津南雄著	4	中江兆民集	中江兆民著
經濟學原理(上卷)	スチユアト・ミル著 スチユアト著(近)	1	日本開化小史	田口卯吉著	2	財產起源論	レイニン著(近)
經濟學原理(下卷)	スチユアト・ミル著 スチユアト著(近)	1	日本經濟論	田口卯吉著	1	組織論	レイニン著(近)
經濟學方法論	カール・メンガー著 メンガー著(近)	1	日本經濟學說の要領	瀧本誠一著	2	三民主義	孫中山著 孫中山著(近)
社會主義の發展	エンゲルス著 エンゲルス著(近)	1	日本商業史	横井時冬著	4	唯一者とその所有	ステイルネル著 武陽隆士著
マルキシズム	デイヴィッド・リカード著 リカード著(近)	1	日本工業史	横井時冬著	4	世事見聞録	本庄榮治郎著
辯證法的唯物觀	デイヴィッド・リカード著 リカード著(近)	2	經濟學の實際知識	高橋龜吉著	2	近世封建社會の研究	本庄榮治郎著
哲學の實果	デイヴィッド・リカード著 リカード著(近)	1	リッケルト論文集	リッケルト著	2	近世の農村問題	本庄榮治郎著
神と國家	バクスター著 バクスター著(近)	1	フッサール論文集	フッサール著	2	マルクスの歴史、社會並に國家理論(上卷)	クワンノリ著(近)
婦人論	山川菊榮譯	6	女工哀史	細井和喜藏著	4	マルクスの歴史、社會並に國家理論(下卷)	クワンノリ著(近)
			婦人解放論	スチユアト・ミル著(近)	4	マルキ國家觀	山本康譯
			社會進歩と地位	ラツパポート著 山川菊榮譯	2	マルクス主義經濟學	河上肇著

□此の文庫は、内容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。
 □此の文庫に收容するものは、東西古今百種の書に互り、校訂、註釋、繙譯、總て典據たるべきを期す。
 □此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
 □表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。
 □一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附録等挿入の場合、必ずしもこの例に依らず。
 □表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
 □定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	定價(錢)	送料(錢)
1	10	2
2	20	4
3	30	6
4	40	8
5	50	10
6	60	12
7	70	14
8	80	16

日輪	横光利一著	1	労働者の居る船	華山嘉樹著	1	海に生くる人々	華山嘉樹著	2	小公子	パルネット著 若松 晴子訳	2	ホワイト・ファンゲ	堀 利彦訳	3	はやり唄	小杉 天外著	3	朝の螢	齊藤 茂吉著	2	十年	島木 赤彦著	2	川のほとり	古泉 千櫻著	2	松の芽	中村 憲吉著	2	海やまの	堀 利彦著	4	立春	木下 利玄著	2	花櫻	北原 白秋著	3	人間往来	興野 晶子著	2	野原の郭公	若山 牧水著	2	原生林	前田 夕暮著	3			
空を仰ぐ	土岐善麿著	2	童謡集	北原 白秋著	2	国民歌謡集	北原 白秋著	2	舞踊詞集	北原 白秋著	2	背徳者	アンドレ・ジイド著 石川 洋訳	2	チエホフ書簡集	内山 賢次譯	5	鴛の卵	土岐 善麿著	3	愚庵歌集	齊藤 茂吉編	3	芭蕉遺語集	荻原井泉水校訂	3	七番日記(上巻)	荻原井泉水校訂	4	七番日記(下巻)	荻原井泉水校訂	4	おらが春	荻原井泉水校訂	4	新花つみ(日記)	荻原井泉水編	3	寡婦マルタ	オルゼシニコ著 清見 陸郎譯	3	句集 虚子	高濱 虚子著	6	井泉水句集	荻原井泉水著	5	サニ	アルワイバセフ著 武林 無根庵譯	6
青年の告白	ジョージ・ムーア著 辻 潤譯	3	一週間	リベティンズ著 池谷信三郎譯	2	室生犀星詩集	室生 犀星著	5	千家元麿詩集	千家 元麿著	3	横瀬夜雨詩集	横瀬 夜雨著	5	修禪寺物語	岡本 綺堂著	3	少年の悲哀	岡本 綺堂著	2	運命論者	國木田 獨步著	2	愛慾	武者小路實篤著	2	作者別萬葉全集	土岐 善麿編著	6	作者別萬葉以後	土岐 善麿編著	6	自傳	片山 瀧著	3	日本橋	泉 鏡花著	5	佛蘭西童話集(第一)	ボームン夫人著 長松 英一譯	3	佛蘭西童話集(第二)	ドルノア夫人著 長松 英一譯	5	佛蘭西童話集(第三)	ヘンロ著 長松 英一譯	3	巴里の憂鬱	ポオドレエル著 三好 達治譯	2

死の舞踏	ストランドベリイ著 山本有三譯	2	奈落の人々	和氣 律次郎著 和氣 律次郎譯	3	争鬪	和氣 律次郎著	2	無名作家他(短篇小説篇)	和氣 律次郎著	5	日記三篇(現代物)	和氣 律次郎著	5	出世	他七篇(現代物) 2 他七篇(現代物) 2	4	恩方	他八篇(現代物) 2 他八篇(現代物) 2	5	噂の發生	他六篇(現代物) 2 他六篇(現代物) 2	4	父歸る	他三篇(現代物) 2 他三篇(現代物) 2	5	藤十郎	他九篇(現代物) 2 他九篇(現代物) 2	5	眞珠夫人	菊池 寛著	6	慈悲心	菊池 寛著	4	新珠	菊池 寛著	5	火華	菊池 寛著	4	受難	菊池 寛著	5	赤い鳥	菊池 寛著	3	明眸	菊池 寛著	5	新女性	菊池 寛著	3
陸の人魚	菊池 寛著	4	第二の接吻	菊池 寛著	3	東京行進曲	菊池 寛著	3	結婚二重奏	菊池 寛著	3	不壊の白珠	菊池 寛著	3	イブセン全集(一)	河野永田小寺譯	3	イブセン全集(二)	大山長谷部河野譯	5	イブセン全集(三)	中村 仲木譯	5	イブセン全集(五)	大山大關中村譯	5	ポルシエザイ	ピートニツキ著 三矢 剛譯	4	キの手記	三矢 剛譯	4	聖書物語(舊約の巻)	ル 神近市子譯	3	聖書物語(新約の巻)	ル 神近市子譯	3	洋服箏筒	トマス・マン著 六立 武生譯	2	今戸心中	廣津 柳浪著	3	嬰兒殺し	山本 有三著	3	芭蕉・夜船・草の詩	吉田 絃三郎著	3	ドレフニス事件	大佛 次郎著	3
新人國記	ア・フランス著 木村 恭一譯	4	シラー詩集	小栗 孝則譯	4	どっこいおいらは	ト 瀧木 達譯	2	獄窓から	和 田 久太郎著	5	波	アルワイバセフ著 原 久一郎譯	3	結婚の悲劇	アルワイバセフ著 原 久一郎譯	5	苦難の路(上)	アルワイバセフ著 原 久一郎譯	4	苦難の路(下)	アルワイバセフ著 原 久一郎譯	4	芭蕉書簡集	萩原 隆月著	3	矢鳥柳堂	志賀 直哉著	2	焚火	志賀 直哉著	2	老火	志賀 直哉著	2	網走りまで	志賀 直哉著	2	速夫の妹	志賀 直哉著	2	好人物の夫婦	志賀 直哉著	2	雪の日	志賀 直哉著	2	暗夜行路	志賀 直哉著	3			

129A-79

短歌集	石川 藤木著	4
詩集	石川 藤木著	5
小説集(上)	石川 藤木著	6
小説集(下)	石川 藤木著	5
評論感想集(上)	石川 藤木著	4
評論感想集(下)	石川 藤木著	(刊近)
書簡集(上)	石川 藤木著	5
書簡集(下)附年譜	石川 藤木著	(刊近)
選歌集	石川 藤木著	(刊近)
信網文集	佐佐木 信綱著	2
三人	島崎 藤村著	3
海へ	島崎 藤村著	5
痴人の愛	谷崎 潤一郎著	4
草雙紙選	尾崎 久彌編	5
國歌八論	土岐 善麿編	3

(以下續刊)





